

2012年 9月11日・北海道新聞「3.11を忘れない」特集では

核災 不条理の町

南相馬の詩人・若松さん「止まった時」描写

東京電力福島第1原発から約25キロの福島県南相馬市原町区に住む詩人の若松 丈太郎さん（77）は3・11以前から原発に反対し、事故による地域の崩壊を詩を通じて警告してきた。東日本大震災と原発事故から1年半。今も「時間が止まったまま」という南相馬を若松さんと歩いた。（報道センター 関口裕士）

高い放射線量

南相馬市南部の小高区。^{おだか}「これ以上行けませんね」と若松さんが立ちつくす。山間の県道の立ち入り禁止の警戒線の先は全町避難が続く浪江町だ。今も1時間当たり2.42マイクロシーベルトと札幌市の40倍の放射線量があった。

小高区の海側にも行った。津波で住宅の基礎部分だけが残り、田畑に漁船とがれきが散乱したままだ。「田の持ち主はどんな思いでしょうかね」。若松さんがじっと見つめる。

3・11後に書いた詩「ひとのあかし」にこんな言葉がある。

<あるとき以後／耕作地があるのに作物を栽培できない／家畜がいるのに飼育できない／魚がいるのに漁ができない／ということになったら／ひとはひとであるとは言えない／のではないかと

岩手県江刺市（現奥州市）出身。福島大卒業後、福島県内で高校の国語教師をしながら詩作を続けた。1994年にチェルノブイリ原発事故後の被災地を訪れ、「もし福島で事故が起きたら…」と考え、作品を書いた。

昨年3月11日は南相馬の自宅にいた。原発が危ないと聞き、約1カ月間、福島市内に避難。戻ると人口は激減し、特に子供がいなかった。「神隠しに遭ったようで不気味だった」

震災後、3・11以前の詩やエッセーが「事故後の状況を予言していたようだ」と注目された。昨年5月に「福島原発難民」（コールサック社）を出版。過去の詩集も増刷された。それでも「3・11で想像力の限界を感じた」と言う。「想像した以上に現実は厳しかった」からだ。国にも電力会社にも、詩人のひとかけらの想像力もなかったのが悔しい。

何度も「憤慨」

小高区を車で回った2時間、若松さんは何度も「憤慨」という言葉を使った。「事故への対処や避難区域の設定、その伝え方など、知れば知るほど憤慨することばかりです」

「不条理な死が絶えない」というタイトルの詩は、<核災は人びとの生きがいを奪い未来を奪った>とつづいた後、淡々と事実を書き留める。

昨年4月、飯舘村で村内最高齢の102歳男性が服装を整えて自死した。同6月、相馬市で乳牛40頭を飼育していた54歳男性が自ら命を絶ち、南相馬市の93歳女性は「お墓にひなんします」と書き残して首をつった…。

「詩は非力だが、それでも書き残さないと、これらの死もなかったことにされてしまう」。実際、ある電力会社の社員は公の場で「原発事故で死んだ人は1人もいない」と発言した。浪江町などでは津波の後、原発事故で救助に入れず救えなかった命がある。それが自分の子や孫だったら一体どうするのか。「想像力の欠如も甚だしい」とまた憤慨した。

南相馬から浪江に向かう幹線道路の国道6号も通行止めで、路肩のアスファルトの割れ目から雑草が伸びている。鉄路も寸断され、南相馬市中心部のJR原ノ町駅にはあの日以来、特急列車が止まったままだ。宮城や岩手が復興へ動きだす中で、「1年半たって福島の異様さが際立ってきた」と若松さんは感じている。

チェルノブイリ訪問直後のエッセー

若松さんは原発事故から8年後のチェルノブイリを訪問直後に発表したエッセーで、次のように書いた。「チェルノブイリの現実」は福島の実現になりつつある。



最悪の事態とは次のようなものを言うのではなかろうか。それは、父祖たちが何代にもわたって暮らしつづけ、自分もまた生まれてこのかたなじんできた風土、習俗、共同体、家、所有する土地、所有するあらゆるものを、村ぐるみ、町ぐるみで置き去りにすることを強制され、そのために失職し、たとえば10年間、あるいは20年間、あるいは特定できないそれ以上の長期間にわたって、自分のものでありながらそこで生活することはもとより、立ち入ることさえ許されず、強制移住させられた他郷で、収入のみちがないまま不如意をかち、場合によっては一家離散のうきめを味わうはめになる。(中略)このような事態が10万人、あるいは20万人の身にふりかかってその生活が破壊される。このことを私は最悪の事態と考えたいのである。これは、チェルノブイリ事故の現実に即して言うことであって、決して感傷的な空想ではない。

と紹介されています。